

令和4年度 第2回 道立江差高等看護学院運営適正化会議 議事録

日時: 令和5年3月13日(月) 15:20～16:50

場所: 函館国際ホテル 2階 サンゴ

(矢元主幹)

ただ今から、令和4年度第2回道立江差高等看護学院運営適正化会議を開催させていただきます。

司会を担当させていただきます医務薬務課主幹の矢元です。よろしくお願いいたします。

まず、お手元に配付しております、資料の確認をさせていただきます。

「次第」、「資料1 (道立江差高等看護学院ハラスメント再発防止策)」、「資料2 (学院生活・ハラスメントに関する学生アンケート結果(第4回))」、「参考資料1 (江差高等看護学院の現状と課題(学校関係者評価会議資料))」、「参考資料2 (江差高等看護学院通信(第8号))」、「参考資料3 (ほめ活特別編・学院のアピールポイント)、(道立江差高等看護学院運営適正化会議開催要領)となっております。不備がございましたら、お申し出ください。

本会議につきましては、前回同様、個人情報等の箇所を除き、後日、資料や議事録をホームページにより公開したいと考えておりますので、趣旨をご理解くださいますようお願い申し上げます。

また、本日、クローズで開催させていただいた理由は、学生の個人情報等も含まれますので、クローズによる開催としておりますので、御了解願います。

それでは、開会に際し、北海道保健福祉部地域医療推進局医務薬務課看護政策担当課長の田原より、一言ご挨拶を申し上げます。

(田原課長)

看護政策担当課長の田原でございます。

道立江差高等看護学院、運営適正化会議の開催にあたりまして、一言、ご挨拶を申し上げたいと存じます。

本適正化会議につきましては、皆様ご承知のとおり、令和3年度に、本日ご出席の3名の構成員の皆様に、第三者委員としてご協力を頂いた「道立江差高看を巡る諸問題への対応に関する第三者調査委員会」の調査結果を踏まえ、ハラスメントの再発防止に向けた、取組の推進を図るために設置をいたしまして、昨年7月の第1回目につき、本日は第2回目の開催の運びとさせていただきます。

構成員の皆様におかれましては、年度末の大変お忙しい中ご出席を賜り、心より感謝を申し上げます。

さて、前回の適正化会議におきましては、ハラスメントの再発防止対策の根本となります、目的と、目標の設定のほか、学院のアピールポイントや、その情報発信のあり方など、様々な観点からご助言を頂き、それらを踏まえまして、学院においては、学生や教職員が、地域の清

掃活動、お祭り、まちづくりについての議論の場など、地域住民との積極的な交流に努めてきているほか、こうした様々な取組の内容については、ホームページや江差高看通信などを通じ、幅広く情報発信をしてきており、更には、地域住民に学院の図書室の開放を行うなど、地域に開かれた透明性の高い学院運営を推進してきているところでございます。

また、本年の1月27日には、今年度から新たに、学生や地域住民のほか、学識経験者として藤井教授にもご参画を頂いた上で開催をしました、学校教育法に基づく「学校関係者評価会議」の場におきまして、出席者からは、とても勉強しやすい環境になった、学院が変化していると感じたなど、運営の改善を評価する意見が数多く聞かれたところでございます。

これも、ひとえに、学院運営アドバイザーの皆様のお力添えの賜であり、重ね重ね心より感謝を申し上げたいと存じます。

一方、本学院においては、後ほど、議題の中で、学院長からもお話しがあるかとは思いますが、教員におきましては、ハラスメント申告を恐れ指導を躊躇する傾向があること、また、学生数が減少し、それに伴う教育効果や教育の質の担保が課題となっているなど、本日、アドバイザーの皆様におかれましては、いくつかの課題の解決に向けまして、忌憚のないご意見を賜りますようお願いを申し上げ、簡単素地ではございますが、開催にあたってのご挨拶とさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願ひいたします。

(矢元主幹)

それでは、さっそく議事に入ります。

議題(1)の「ハラスメントの再発防止対策について」、「ハラスメントの再発防止に向けた各般の取組状況と評価について」、「学院生活・ハラスメントに関する学生アンケート結果について」、「今後の取組について」を江差高等看護学院から資料1及び資料2に基づき説明いたします。

(石谷学院長)

ハラスメント再発防止対策について、7月以降の取り組み、1年間の成果と今後の課題をご報告します。まず、7月以降の取り組みを中心にご説明します。

(佐々木副学院長)

資料1をご覧ください。

まず、①学生対応ですが、相談窓口や目安箱の活用方法の周知、学生面談、担任のホームルームや各種オリエンテーションの充実など、ガイダンス機能の強化に務めてきました。学内で学習できる時間を17時から19時に延長したり、課外活動しやすい環境を整えてきました。

次に、②保護者対応ですが、教員と保護者との情報共有、信頼関係構築に向け、夏休み、冬休みの年2回、リモートでの保護者面談を実施しております。あわせて、学院通信で近況を報告し、保護者からのお問い合わせについても速やかな対応を心がけております。

続いて、③実効的な通報窓口についてですが、ハラスメントの相談窓口、相談員を学生掲示

版で常時周知し、相談があった場合は道の指針に沿い適切に対応できるようにしています。また、ハラスメント相談に限らずどのような相談でも受け付ける目安箱を設置し、対応しています。4～10月までに4件の投書があり、内容としては寮生活のことや就職のこと、学院内の衛生環境などで、日頃の不満や要望があげられました。改善できることは改善し、できないことは学生の気持ちを丁寧に聞きながら現状を説明するなどして対応しています。11月以降は投書はありません。定期的なハラスメント調査を実施し、ハラスメントの早期把握・対応に努め、ハラスメントに関する研修も実施しています。

次に、④教員の人材育成体制ですが、学内研修を定例で開催し、3月の予定を含め合計11回となります。道立高看合同での研修は2回実施し、そのうち1回は藤井先生にも講師をお願いいたしました。また、外部の研修にも積極的に職員を派遣したり、専門職として自己研鑽の必要性を伝え主体的な研修参加を勧めるなど、計画的な教員の資質向上に努めているところです。学内研修の実績はご参照ください。

⑤学生同士が学び合う体制ですが、「ほめ活」をプロジェクト化し取組を進めました。年間トータルで8回実施し、9割以上の学生が参加し、カード総数は学生405枚、職員244枚となりました。アンケートからは「ほめられて嬉しい」「ほめた相手が喜んで様子を見て自分も嬉しくなった」などの意見のほか、人の良いところを探すのが上手になったなどの意見がありました。集まったカードは年度末に学生ごとに整理し、ほめられた相手に手渡しました。

12月の開学記念日に、ほめ活・特別編として学院のアピールポイントを募集したところ、たくさんのメッセージが集まりました。学院がきれい、少人数で指導が受けやすい、学生寮があることなどのほか、教員と学生のコミュニケーションについても前向きな意見がありました。参考資料でお配りしておりますので、ご参照ください。

(大島副学院長)

次に、⑥地域との連携について、外部に開かれた学校運営をめざした取組ですが、まず、江差高看通信は3月までに年4回発行し、ホームページにも掲載をしています。参考資料として3月号を配付しておりますが、学院行事や各学年の学習状況などを掲載し、江差病院や管内各町、振興局や高校等にも送付しています。12月に発行した第7号はコロナワクチンの接種会場となっていた講堂に置かせていただき、多くの町民の方にも見ていただくことができました。学院ホームページでは、学院行事や学生の状況など積極的に発信しており、アクセス件数は月平均1万2千件前後で、他の道立高看よりかなり多い状況です。

地域イベントやボランティア活動については、役場、社会福祉協議会、江差高校などから情報をいただき、自治会を通じて学生の参加を募っています。町づくりの会合であるネクストイノベーションや海浜清掃、かもめ島祭り、高校の体育祭などに職員、学生が参加したり、昨年の12月には自治会の企画で江差病院の入院患者様にクリスマスカードをお届けしました。クリスマスカードを受け取った患者様のご家族からお礼のお手紙をいただくなど、学生も思いが伝わったと感じた取り組みでした。

また、地域貢献の一環で、図書室の一般解放も始めました。これまでは、実習施設等、関係

者のみの利用としていましたが、保健医療福祉関係者や一般の方にもご利用いただけるよう周知しています。関係者向けのチラシは保健所を通じ各施設に送付し、一般向けのチラシはワクチン接種会場や役場に置いていただき周知しています。11月以降、3、4の方が見学に来られたり利用されています。

最近の学生は、子どもや高齢者と関わる機会がほとんどなかったり、学生数が少ないため学内の場面設定だけでは十分な演習効果が得られない状況があり、ネクストイノベーションを通じて、地域の方に模擬患者のご協力をいただきました。病院実習直前に実施したので、ほどよい緊張感を持って実践的な演習を行うことができました。

⑦自己評価機能の強化ですが、外部に開かれた学院運営に向け、学校評価の体制を見直し、自己点検・自己評価が教育課程や学院運営の改善につながるよう、取り組んでおります。1月に実施した学校関係者評価会議では、藤井先生にも構成員としてご参加いただき、学生代表や地域住民なども含めた皆さんに学院の取り組みをご報告しました。当日は報道発表も行い、各報道機関に取材いただきました。

次に、⑧学生確保対策ですが、7月にオープンキャンパスを企画し、学生による模擬演習、オリジナルグッズの作成など様々な準備を行っていましたが、残念ながら新型コロナの影響で中止となり、その後、希望者には学院見学などで個別に対応してきました。今月下旬に実施する一般入試Ⅱ期試験については、道南や札幌市内の高校に個別で案内したほか、函館市内の高校に電話かけを行い、進学先が決まっていない学生がいるところを訪問しました。

(佐々木副学院長)

最後に、⑨教職員の職場環境ですが、講師の欠員解消に向けた取り組みを行うほか、非常勤講師や実習インストラクター、教務事務補助職員の任用などを行い、専任教員の負担軽減を図ってきました。また、カウンセラーによるミニ研修などを実施しています。引き続き、職員が生き生きと働けるようマネジメントを行っていきたいと考えています。

(石谷学院長)

次に、取組の評価についてご説明します。評価指標の一つである学生アンケートについて、5月から2月までの結果を報告します。資料2をご参照ください。学院生活は「楽しい、まあまあ楽しい」と回答した学生は5月に65%でしたが、2月には76%に増えました。自分自身に満足しているか、自分が役に立たないと感じるか、今の自分が好きかなど、自己肯定感に関する質問についても、いずれも5月より2月の方がポジティブな回答が増加しています。

ハラスメントについては、5月、7月、2月のアンケートで、「私生活に勧奨するようなことを言われたりされた」、「容姿・年齢・交友関係等に関して、執拗に聞かれたり話題にされた」、「言葉の暴力と言えるようなひどい非難叱責を受けた」の項目について「たまにある」がそれぞれ1件あり、「比較的軽微な被害だったので我慢した」などとの回答があったところです。2月の結果については、職員間で期間中に対応した事例を想起し、アドバイザーの山内先生にご相談しました。具体的な状況をご説明したところ、いずれも、不適切な指導やハラスメ

ントには該当しないとの助言を得て、その結果を公表しました。在校生には結果を報告し、ハラスメントと思われる言動にあった際は、相談窓口や目安箱を活用し相談行動をとることを、改めて周知したところです。

授業評価の結果については、現在、集計作業を行っているところですが、5月頃までに自己評価報告書を取りまとめ、学校評価関係者会議で報告する予定です。

次に、各項目について、職員からも意見を聞き、成果、課題、今後の対応をまとめました。

①学生対応の成果としては、学生と教員とのコミュニケーションが増え信頼関係が構築できた、学生が明るくなった、学生らしい自己主張をするようになったり要望や意見を言うようになった、課題としては、指導内容や状況にかかわらず“嫌な気持ちになればハラスメント”と捉える学生への対応、再試験が多いなど学業不振の学生指導、学習支援、各種ガイダンスの時期、内容の共有が不十分、今後に向けては、教員の人材育成（学生対応の基本姿勢、指導とハラスメントの違いの認識、丁寧な指導と毅然とした指導の双方の充実）、学習支援策の強化、ガイダンス機能の充実（教育理念に沿った計画的なガイダンスの実施）などを考えています。

②保護者対応は、平常時から信頼関係が構築できた、生活や学習支援に保護者の協力が得られた、問題行動にもスムーズに対応できたなどの成果があり、引き続き保護者面談を継続していく予定です。

③実効的な相談窓口では、ハラスメント相談窓口、目安箱を実効的に運用できたものの、相談窓口を知らない学生もおり、ハラスメント相談窓口、目安箱の周知徹底をはかります。

④教員の人材育成では、注意するだけでなく自身の関わり方を振り返る、学生の意見を学院運営に反映させる等、学生対応の基本姿勢が変化したとを感じる一方、ハラスメント申告を恐れ指導を躊躇する傾向があります。引き続き、学生対応の基本姿勢、指導とハラスメントの違いの認識、丁寧な指導と毅然とした指導の双方の充実など、教員の人材育成に務めていきます。

⑤学生が学び合う体制では、クラスや係運営、自治会等、教員のサポートにより行事を企画したり話し合いができたり、学年の隔たりを超えた交流ができました。今後は、より一層学生の主体的な取り組みとなるよう意図的・計画的な指導を行っていきます。

⑥地域との連携強化では、学院の取り組みを地域の方に知っていただく機会やツールが増えました。学生数の減少による演習効果の低減が課題で、模擬患者や地域の社会資源を活用した実習など、地域と連携した演習や実習の工夫を行っていきます。

⑦自己評価機能の強化では、学院の現状・課題を学校関係者評価会議で共有することができ、今後は、地域と連携して課題の共有、解決に努めていきたいと考えています。

⑧学生確保対策としては、来年度の入学生はまだ確定していませんが、今後は高校生への直接的な働きかけだけでなく、学院の魅力の底上げが必要と考えており、道立の強み、江差らしさを活かした実習プログラムを来年度から運用できるよう調整しているところです。

参考資料1は、学校関係者評価会議で報告した現状と課題の資料です。学生数が減少している現状と今後の対策を整理しておりますので、ご参照ください。

⑨教職員の職場環境では、引き続き、欠員補充の取り組みと、非常勤講師、実習インストラクター、教務事務補助員等の任用を行っていきます。

今回の報告にあたり、改めて第三者調査委員会の調査書を読みました。学院の再発防止対策はこの調査書を参考に作成したのですが、取り組みによって、学院は確実に生まれ変わりつつあると感じています。アドバイザーの先生方には、これまで、学院運営の悩みについて多くのご助言をいただいたことはもちろんですが、調査書の中で明確な道筋を示していただいたことに改めて感謝申し上げます。

引き続き、職員一丸となり、学生から選ばれる学院、地域社会から信頼される学院づくりに努めていきたいと思っております。

学院からの報告は以上です。

(矢元主幹)

それでは、ただいまの学院からの説明に関しまして、アドバイザーの先生方からご質問やご意見等がございましたら、ご発言の方、お願いいたします。

藤井先生、先日の学校関係者評価会議で、座長を務めていただき、大変ありがとうございます。その関連で、一言、お話いただいてもよろしいですか。

(藤井アドバイザー)

失礼なこと言ってしまって申し訳ないのですが、行くまでは、そこまで明るい雰囲気では学校が変わっているのを想像もしてなかったのが、正直びっくりしました。また、司会を仰せつかったのが、私はせっかく集まっているので、全員に意見を求めようと思って聞いたんですけど、学生の方の話はよくマスコミによく取り上げられましたし、1人の方、女性の方が出てきたけれど、話された人、話された人がみんな変わったということ、それぞれの見えるところから発言されていて、それも驚きました。例えば、学生に対する先生方の接し方っていうのもすごく変わったとか、スクールカウンセラーの方は、教務室での空気とか、学生の表情とか、かなり具体的に明るくなったということをお話されておりましたし、また、地域の方も、地域行事に色々なイベントに学生が参加したときの、もちろん参加してもらったからよかったということもありますが、参加したときの学生の積極性といいますか、そういうものをお話しましたし、病院での手紙が資料に載っていますけど、評価会議では全文が載ってたんですけども大変感動いたしました。旦那さんが亡くなり、自宅に戻ってきていろいろなものを見たら、その中に学生からのクリスマスカードが入っていて、自分の夫が亡くなる時に最後に見たものがカードだったって話がありました。私は、実は第三者調査委員会の報告書の中には尾木先生のことを出して、「結局、学校っていうのは先生なんだ」ということを書いてそれで批判したんですけど、今度は逆に先生方がああいうふうになるとやっぱり学校も変わるんだなあ。それからマスコミには報道されていなかった評価会議はですね、すばらしいものだったと思っています。できれば、やはり新聞等にもいろんな人がああいうふうに評価したっていうことをもっと言って欲しかったのと、今、自殺の件が残っているので、それにぶつけるような形ではあるのですが、それとは別に学院が変わってきているっていうことはもう少しきちっと評価して新聞に載せてもらいたかった。最初に言いましたように、大変、そういう意味ではいい会議だと素晴らしい

く感じました。

平出議員さんも言ってましたけれども、学生確保というのが、今年度は仕方なかっただろうけど、来年度も人数少ないことも指摘されてましたけど、確かに来年度の人数を見ると、やっぱり学生を確保しなければ学校としての存在意義というのか、それはなくなる、薄れる訳ですので、今回も、最後の最後まで高校に行って進路が定まってない人に聞いたということを知りましたので、そこまで徹底しておやりになっているんだなと大変高く評価します。さらに早い段階で、来年度ですね、目標、数値目標を決めて、例えば20人とか、10人とかですかね。目標に到達させるために、そのオープンキャンパスに何人呼ぶかとか、それで、私が所属する函館短大では、オープンキャンパスに来た人数の何掛けってというのが大体、当たるんですよ。そういうことも、ちょっと調べられながら徹底してやられた方がいいと思いました。

(矢元主幹)

今年の江差高看のオープンキャンパスは、コロナの関係で中止になったということでありましたが、学院長の方から、オープンキャンパスの関係について話しをいただいてもよろしいでしょうか。来年度の目標立てといたしますか。

(石谷学院長)

来年度のオープンキャンパスについては、具体的にどのようにやるかっていうのは学内でまだ検討していないのでこれからですけれども、高校廻りに行った感触から、学生さんだけじゃなくて、進路指導の先生方への働きかけとか保護者への働きかけというのもあってもいいのかなというご意見もあって、どういう方法が取れるかわからないのですが、そういう機会も作っていったらいいのかなと思っています。

(矢元主幹)

ありがとうございます。それでは、山内先生から何かございますか。

(山内委員)

質問でもよろしいでしょうか。令和5年度の新規入学者の見込みとしては、何人くらいですか。

(石谷学院長)

今時点で、推薦と一般試験が終わって、入学が確定しているのは4名。これからⅡ期試験がありますが、出願状況が今のところ3名。もう少しⅡ期試験の応募期間はあるのですが、もしその3名が全員合格したとしても今の時点では7名。

(山内アドバイザー)

学生の少ないというのは、なかなか学生のモチベーションが上がらないところがある。3次

募集というのはさすがに無理なんですか。

(石谷学院長)

そうですね。4月入学式を控えていて、3月23日でもかなり手続き的にはぎりぎりです。

(山内アドバイザー)

仕方ないですね。

(矢元主幹)

全道的にも、やはり少子化や大学志向という状況もありますが。

(山内アドバイザー)

そうですね。学校関係者評価会議が1月にやって、それを見た来年度というか、令和5年度は、なかなか直結しないんでしょうけど、令和6年度の入学者に、先日の評価会議がやっぱりいい影響が出たらいいなと思います。1月に出て、4月から入ろうかとすぐには変えられないので、それでもこれを見た今の高校2年生とかが、これだったら私が卒業する時はここをちょっと変わってるんだって思ってくれば、すごくいいかなとは思いました。もっともこのように発信していけば、実際にその卒業生が、やっぱり口コミは大きいと思うので、卒業生が、色々良かった、変わったんだっていうことを職場とかでアピールしてこれれば、それをまたどこかからフィードバックして、高校生だとか、伝わっているじゃないかなと思うのですが、すぐになかなか効果っていうのは出ないと思うんですけども、こういうのは数年かかるのは間違いないので、その間、粘り強く、諦めずにやるしかないのかなっていう気はしています。報道の効果が大きいので、負の効果もすごく大きいのですから、そこから一気に復活するっていうのはなかなか難しいので、地道に活動していただければなと思いますし、このホームページを見ても一定のアクセスがあるので、大きなツールじゃないかなと思います。やっぱり顔が見える学校の方が入ってもらいやすいということがあるかと思います。引き続き、取り組んでいただければと思いました。以上です。

(矢元主幹)

ありがとうございます。先日マスコミの取材を受けたと聞いたのですが、どんな感じだったんでしょうか。

(石谷学院長)

テレビ局から取材の申し込みがあって、趣旨としては、3月中に、別に立ち上がっている第三者調査委員会の結論が出るだろう。それに合わせて、今の学院の状況を報道したいということでご連絡いただいたので、学院の状況を知らせていただくいい機会にはなるということでお受けしました。内容としては、学院長のインタビューということで、これまでの再発防止策の取

り組みについての具体的な部分と、あとは校舎の中のほめ活のボードだとか教室の撮影と、学生代表の声を聞きたいということで自治会長と寮長の2人からインタビューをするということで、学生のインタビューの場面には、私は立ち会っていないので、どんなことが話されたかというのはわからないんですけども、記者さんがおっしゃるにはすごく学校が明るくなって楽しいというような話をしていたと聞いています。学生と話す中で、教務室の雰囲気が変わったと、以前は教務室に入る時に非常に緊張して入っていたのが、今はそういうことがなくなったということが、記者さんの印象に残ったようで、急遽なんですけど、教務室の雰囲気というか、そういうのを撮影させてもらえないかとリクエストがあって、教務の先生方と相談をして大丈夫だねってということで。3年生が卒業して学生が少なかったのも、あまり教務室に出入りする学生がいなかったんですけど、たまたま教務室に来ていた学生と先生方と話してる風景を撮影されていきました。実際、今の学院の取り組みとしては、よくわかったと言っただけなんですけども。どうしてもその第三者調査委員会の結論と併せての報道になると、今の在学生在が非常に、何ていうか自分たちの学校のことをマイナスの内容で報道されることに対して、すごく傷つくというようなことも聞いているので、そのあたりについては、今の学生への配慮ということもお願いしたところです。

(田原課長)

記者と話しましたが、何度も江差高看に行っており、例えば、当時の副学院長に対して直接話を聞いたりとか、学院内にも入ったことがあるが、今回、今、学院長がおっしゃった通り、本当に雰囲気、空気が全然違って、ここまでの改善が図られたことを本当に記者も驚いておりました。

(矢元主幹)

平松先生、お願いします。

(平松アドバイザー)

本当にいろんな改善のご努力は大変だったと思いますし、努力が結果として出ていると思っています。私としては、2回ほどアドバイザーとしてご相談があった内容にお答えするに当たって皆さんの迷いが見えました。ハラスメントがあるので、本当は毅然とすべきところも意見を聞かなくてはならないと、あるべき姿とのジレンマがあるのだろうと推察しながら見ておりました。例えば、日曜日に教室を使えるように学校開放していますよね。そういうことをする必要のあるのだろうかと思いましたが、正直思いました。教職員の休息ですとか、管理の問題もありますので、要望があったからといって何を聞き入れて何を断るかっていう辺りの判断が非常に難しいのだろうなど。きちんと意見を聞いて対応できるところは対応をするという、そのような動きになっているのだろうと思いつつも、毅然として指導する、毅然として断るというのが、大変なのだろうと推察しながら見ておりました。学生の確保につきましては、人数だけではなく、現状をみると質の担保がかなり難しいだろうなど。先生たちのご指導が大変だろうと思いま

す。あとは、グループ効果を考えますとこの人数で効果的な教育が果たしてできるのだろうか。看護教育で通常の学校であれば、運営は無理ということで閉校の道に進むでしょう。現実的に学生の確保人数が一桁の学校は閉校いたしますし、閉校の準備に入るとい学校もあると聞いています。地域の要望等もあり運営しなければならないのかもしれませんが、やっぱり存続自体を考える時期だと思います。今いる学生、そして入学させたので良い教育をすることは責任ですが、今後ってということになった時に、検討する必要があると思います。私の学校もそうですが、他の専門学校も特に地方の専門学校は50%の充足率の学校もあり入学生が激減しています。一方、私立の看護大学は定員が増えているという現状で、推薦入学でほとんどが入学できる時代になっていて、看護教育はこれからどうなっていくのだろう、暗黒時代を迎えそうだと心配しているところです。ハラスメントがあって大変だから閉校したではなくて、時代と地域の要請を考えて、今後を検討する時期にあると思います。

(矢元主幹)

ありがとうございます。江差もそうなんですけれども、紋別も旭川もかなり入学者数が減って、全体的に入学者が減っています。

(平松アドバイザー)

そうですね。道立の学校は厳しいですね。旭川は私立の旭川大学も公立になりまして、受験者数が増えていることもあり、道立の旭川看護学校も非常に難しい。北海道立だからやっていける。そういう状況なので努力するところと整理するところをきちっと見定めていかないと運営は難しいだろうと思います。先生たちが頑張っているけども学生が来ないという問題は、ハラスメント問題と切り離して見られないという辛さはあると思いますが、きちっと今後の方向性を出さなければならないと思います。

(矢元主幹)

はい、ありがとうございます。やはり分析をしっかりしていかなければと思います。

(平松アドバイザー)

どんなに努力しても今後学生を確保できるかを考えて。他の学校も見直しの時期が来ていて大変な状況です。藤井先生、大学も学生確保が大変ですよ。

(藤井アドバイザー)

大変です。定員60人におとしたのですが、来年度は53か54。かなり努力してそこまでいったけど60は越せなかった。一方で、系列の函館大学は、すごくいいですよ。一時は、かなり厳しかったのですが倍率を独占している。ここ数年、充足率はいいですね。やはりロコミですね、それはあります。高校なんかも落ちているのですけど。砂川でしたか、公立高校で、すごく生徒を集めているっていうのがありましたし、全国的に見ると、すごいアイデアを出し

てそれがマスコミを通じて広まると、結構、わっと集まるっていう、はやりみたいなものも確かにありますよね。それこそ旭山動物園での起死回生のそれと同じバージョンが、例えば、沖ノ島、離島の高校で、爆発的に倍率が増えたとか、逆に地元の学生が入らなくなって、地元枠を増やさないとはいけないとか。山内先生がおっしゃったようにそうそう変わらないとして、今の努力を、めげないでずっと続けていくという感じで、さらにアイデアとして、そういうのは絶対大事だと思います。それで、ああいういい評価会議なんかも、もっと何かもうちょっとよく報道してもらいたいっていうのも、そこにあるんですよ。

(平松アドバイザー)

現実的に、高校は100%に近いぐらいの進学率ですが、看護学校は看護師になりたい人に限定されるのでぐっと狭まります。その中で、都会で交通の便がいいとかが人気があるのですよね。やっぱり、地の利。そういったところで見ると江差は、圧倒的に不利なのははっきりして。そこに、魅力となると、本当に難しいと思います。

(石谷学院長)

さっき、平松先生がおっしゃったように、一人一人の学生の指導に非常に時間がかかるようになってます。人数は少ないのですけれども、本当に一人一人、いろんな状況の学生がいて、その学生を他の学校と同じように国家試験に合格できるレベルまで指導する。土日の学院解放も国試直前の学生たちから要望があって、2週間限定ではあったのですけれども、私達もやれることを全部やろうということで、必修問題対策をやったり、そういうことで取り組んだ経過はあったんですよ。

(平松アドバイザー)

そうですね。当校も国家試験では大特訓の日々で。自分で学習力をつけていく、というのが教育のテーマですが、合格のためには教えこまなければならず、それを学生は厳しいとか、させられていると。こちらの思いと、学生の受け取りが違いやっぱり難しいですよ。こっちがよかれと思うことが、学生が望んでいなかったり、質を考えると、かなり難しい。

(石谷学院長)

入学してきた学生に対して私たちには責任があるので、きちんと教育しなければいけないと思うんですけれども、本当に人数が限られてしまうと、その中での演習や実習で学び合う機会が非常に少なくなってきますので、難しいなというふうに思っています。

(山内アドバイザー)

どこかの学校で合同で何かをやるのは授業とか実習とか難しいのですかね。

(石谷学院長)

道立の高看は他に二つあるので、そういうこともできないかということは以前から話題にはなるんですけども、それぞれお願いしている非常勤の先生が違ったり、カリキュラムも同じものではないんですね。若干シラバスが違ったり、時間数も違ったり、内容も組み方も違ったり、それぞれの学校の特性もあって。

(平松アドバイザー)

指定規則上、合同講義はできないのでは。例えば一緒に研修をすとか、他校の学生と交流しながら学び合うのはいいんですけど、一単位の授業として、他の学校と一緒にやるということはたぶん認められないですよ。特別講義になると思います。新カリキュラムになって多職種との学びは必要ですが、なかなか学校を超えてっていうところは難しいですよ。ほかの学校の学生と実習で一緒になってそこで共に学ぶということはできると思いますけど。

(山内アドバイザー)

学習効果という意味では、教員から1時間教わるより学生同士で1時間勉強した方が、やっぱりかなり効果が上がりやすいというのがあって、一般的な話なので、学生含めてやっぱり学生同士の学習効果が全然上がってこないから、高め合うシステムですかね。あればいいなど、やっぱり教員が教えるだけで相当限界が早く来るっていうんですかねえ。なかなか厳しいものがある。学生同士で高め合う、教え合う。やっぱりライバルと切磋琢磨する関係がないとなかなか上がってこないと思うんですよ。ただ、学生が少ないと限界がある。なんかこう、合同かなんかで、何人か集まって、たくさんにならないと上がってこないかな。何かいい方法があればいいですけど。

(石谷学院長)

参考資料1のスライドの11にも載せているんですけど、「道立高看の方向性について」という資料の中で、看護学校で演習や実習が非常に重要になっていく中で、通常4人から8人くらいグループの単位でそれが4つから5つくらいで演習をやっていけないと、十分な教育効果はない。網走高看も非常に学生数が減ってきて、その時点で検討をした時に、当時施設協議会のご助言もいただきながら、こういう考え方で整理しているんですけども、少なくとも12名くらい。それよりも多い20名くらいいないと。今、3年生が12名で卒業しましたが、12名だと実習が4グループに分かれます。2年生も17名なので、4グループで行けるんですけど、1年生は8名で2つにしか分けられなくて。何クールかあるんですけど、今回実習が終わって、メンバーを入れ替えたりしてるんですけど、非常に狭い人間関係でやっているの、学生もちょっと息が詰まりますね。

(平松アドバイザー)

関係性が悪くなったら最悪ですね。

(石谷学院長)

そうですね。今のところは問題ありません。現時点では4人、5人と来年度もそういう人数であるんですけど。例えば、1人しか入らなかったら、私たちは責任を持って教育できるのか、それが一番危惧される。今回、推薦で入って来てる方も、社会人経験者が2人いるので、高校卒業したばかりの方が少ないんですね。社会人をやってそれから希望してっていう方が入ってくださって、それはそれでありがたいんですけども、高校を卒業する人数は明らかに減っている。

(平松アドバイザー)

それじゃ、高校生は2人ですか。

(石谷学院長)

高卒が2人と社会人経験者2人です。なので、本当に、今の圏域の中学校卒業生とか高校卒業生とか見ても、どこもそうですけどもどこの圏域も減りますね。

(平松アドバイザー)

そういう状況だと、講師も講義を引き受けることを躊躇される。何人かの学生に対する講義をするとすると、講師もモチベーションが上がらないというか。授業によって、グループ効果を狙ったりだとか、ディスカッションさせたりだとか、そういう授業が多いので、講師の先生たちが講義に行きますよ、と言ってくださる方がいるか、そこも問題になると。また、北海道の地域医療担う看護職員の育成を目的としていますが学生4名の入学で、設立理念にかなっていませんか、というところですよ。

(山内アドバイザー)

高校の先生からしたら同級生2人しかいないよということだったら、案内しづらいですよ。10人、20人同級生がいるから一緒に頑張ったらどうだって、言いやすいけど。2人しかいないんですと、勧められないですよ。

(石谷学院長)

本当に2人、3人となると私達も責任もって育てるっていうことは難しくなっていくって日々感じる場所です。

(平松アドバイザー)

2人、3人だと見なくもいとことかみえてしまう。学生も息苦しいですよ。

(石谷学院長)

息が詰まってしまう。

(矢元主幹)

そういうところが課題というところですね。

(平松アドバイザー)

やっぱり学校としてというところを考えたら。

(矢元主幹)

道として、今後の運営についても考えていかなきゃいけない。

(山内アドバイザー)

簡単でも特別授業、合同で沢山で学び合う、システムの中でできる範囲でですかね。

(石谷学院長)

施設協議会の道南の地区で、函館市内の学校と連携しながら、卒業講演会とかそういうことをやっています。コロナで集まるということをやめていたので、そこを来年度以降、検討したいと思います。

(平松アドバイザー)

函館での講演会の参加ですよ。学生は気後れしませんか。例えば函館市立が70人で3学年だったら200何十人ですよ。他も40人定員の学校じゃないですか、4つありますよね。そういうところに行くのは学生が嫌な思いをしないだろうか、と私思いますよ。どうなのですか。気後れとかあるのでないかな。学生の気持ちを考えて参加を考えていかないと。

(石谷学院長)

国家試験の時によく教務室で話しをしていたのが、国家試験の会場って結構何百人入るような会場でやるんですけども、うちの学生は入っただけで雰囲気になじめちゃうのが心配で、逆にそういう経験をしたほうがいいかな、なんて思ったりもする。

(平松アドバイザー)

国家試験はやっぱり個ですもの。同じ学校でも分けられたりします。あなたの席はここよ、だから。何か学校で交流しましょう、というのと国家試験は全然、違うので。

(佐々木副学院長)

卒業講演は、講師の手配とかを考えたときには、ちょっとぎりぎりだねというところもあり、卒業生にすることが効果的なのかっていうところ考えると、私は入学生に、これから頑張っただねというのが、効果的なのかなって思ったりします。それが1年後、どんなふう感じてるか

っていうのも追跡してみると、継続できるかっていう評価もしやすいのかなっていうふうに思っています。令和5年度はその準備というところにして、翌年度に新入生対象に講演の企画ができればいいですねということをお話しています。

(矢元主幹)

ありがとうございます。

(藤井アドバイザー)

今の建設的になっていうか、未来像といいますか、そういうふうには話になるっていうことは、いってみれば、ハラスメントの再発防止策とか適正化会議の役割が終わったんだなというふうに思っています。学校が適正化される。今、途上で7割くらい、まだ学生のいろんなものもあるし、ハラスメントを行っていた先生方もいるし。であれば、その中でそこの方は先生方のご努力で解消されているってなれば適正化されたというふうに思います。

(矢元主幹)

はい。ありがとうございます。

次の議題にいきたいと思いますが、その他、私の方から、今、藤井先生からもお話のありましたが、アドバイザーの任期のことですが、開催要領を添付させていただきます要綱の第5「設置期間」について、「本会議の設置期間は、施行日から概ね運営適正化図られるまでの当面の間とする」と決まっております。今、藤井先生からもありましたとおり、また、江差高看からも再発防止の関係について報告ありましたように、現在、運営の適正化について努めておりまして、あと、学生確保については、今課題等がありますけれども、ある一定程度、運営の適正が図られたのではないかと考えております。本会議におきましては、今年度をもって終了したいと考えておりますが、皆様、よろしいでしょうか。

(山内アドバイザー)

はい

(平松アドバイザー)

はい

(矢元主幹)

それでは今回の会議をもちまして、適正化会議の方は終了させていただきたいと思っております。これまでのご協力いただきましたことについて、大変ありがとうございました。

それでは、予定した議題につきましては以上ですが、全般について、何かございますでしょうか。それでは、会議の方を終わらせて頂きたいのですけれども、今回最後というところがありますので、アドバイザーの先生方から一言いただきたいと思っておりますが、藤井先生から

一言、言葉をいただいてよろしいでしょうか。

(藤井アドバイザー)

先生が変わっても、やはりいいものを残してそれを外にどんどんアピールして、令和6年度、20人とか、そうですね。入学者になればいいなっていうふうに感じています。頑張ってください。以上です。

(矢元主幹)

平松先生から一言よろしいでしょうか。

(平松アドバイザー)

本当に力足らずなところで、勝手なことをいろいろ申し上げ反省をしております。自分ではすごく勉強もさせていただき感謝しております。後は、このご縁が切れるということではないと思っておりますので、私としては同業者として、同じ悩みを持つ者として、例えば学生の確保であるとか、講師の確保、あと、教育の継続性のところで同じ悩みを抱えているので、気軽に、相談をこちらからもさせていただき、SOSも出させていただきます。これからも、お互い協力していければと思います。本当に大変お世話になりました。ありがとうございました。

(矢元主幹)

山内先生から一言よろしいでしょうか。

(山内アドバイザー)

第三者委員会から関わらせていただいて、ずっとこの江差の再出発をいろいろさせていただきました。やっぱり順調って言うといいと思うんです。再出発ができて、もちろんここがゴールではなくて、これからもずっと、同じように目標っていうのですかねそこ大事に、今後も、続けていただければなど。今はすごく願うところでございます。ただ一方で、学生の指導というところで、なかなか学生の声ばかり聴いてると、少しく本来すべき指導っていうのを躊躇してしまうところがやっぱり出てくるかと思えます。そこを折り合いというところを常に自問自答しながらやっていただければなどと思うのと、やっぱり、厳しい指導するとき、必要だと思う指導するときこそ言葉を多く、これまで、ハラスメントだって騒がれてたのは、その部分が少ないからだと思うんですね。必要な指導をしなきゃいけない時に言葉が少ない。だからこそ、学生に伝わらない。余計に学生がこう、あれっと思うと、一番聞きたいところが何かシャットダウンされていたんじゃないかなと思うので。あれっと思うとき、学生が、疑問に思うことをきつく言ったときこそ言葉を2倍3倍にして説明することによって、道が開かれると思うので。幸いにして人数が少ないものですから、一人一人の学生に時間をかけられるのだとすれば、いいように考えてやっぱり厳しく言わないといけないという時ほど、ちょっと時間をかけていただいて、今後ともやっていただければなどと思う。先ほどの、毅然とした指導っ

てなかなか難しいところがあって、本当に、ここは、まさに自問自答をしていくしかないと思うのですが、やっぱりその中で、教員の方も、失敗しちゃったなと思うこと、言いすぎたなって思うことって当然出てくると思うんです。それも仕方がないんです。だけれど、それはやっぱり、後からフォローすることも必要で、あの時は言い過ぎたね。昨日はちょっと言い過ぎたねと。先生、ごめんねと。だからもう一回頑張ろうねっていうやっぱりフォローするだけでも全然違うと思うんですよね。こういうアンケートなんかでも後から少し丁寧に説明するだけでも学生の受けとめが全然違うので、失敗しちゃう、行き過ぎた指導しちゃうことっていうのは、これはやむを得ないときがどうしてもあるので、後日、丁寧に説明するだけでも、結果大きく違うことになるはずですのでそういうことも、考えて心にとめてやっていただければと思います。本当に長い間っていうのもありますけど、私もすごく勉強になってよかったなあと思っております。

(矢元主幹)

ありがとうございます。最後に田原課長から一言お願いします。

(田原課長)

このように、学院運営の適正化が図られつつありますのも、3人の先生、アドバイザーのおかげでございます。重ねて感謝を申し上げたいと思います。しかしながら、やっとスタートに立ったところでございますので、先ほど平松先生からもお言葉をいただきましたけれども、今日でアドバイザーの職は解かれますが、また何か困ったことがございましたら、アドバイスをいただければと思っております。よろしくお願い申し上げます。私から以上です。

(矢元主幹)

それでは以上をもちまして、江差高等看護学院運営適正化会議を閉会いたします。本日は、大変お忙しい中ありがとうございました。